三　通

人の長たる者、将帥たる者は皆、物的欲求さえ捨て去ってしまえば、得られないものは何も無い。それゆえに、あらゆる道理を明白に理解して、よく物に通じていなければならない。通じるという事については、別途伝授したいことがあるけれども、先ず自らの心に通じ、そして他人の心に通じるまでに究（きわ）め、自他の道に通暁することができれば、後には自ら天心の道にも合致するものである。よく時機（事の起こる「機＝チャンス」）に一致し、あらゆる道理に通じて三通心（自心に通じ、他心に通じ、天心に通じる）に全てを任せるならば、天地のあらゆる事柄を測（はか）り知ることができる。ましてや人の心などは測るに足らないものである。このようになれたならば、匹夫（身分の低い男）といえどもけっして賤しいものではない。困窮（貧賤）と栄達（富貴）は、元来、天の然らしめるものと、自ら得るものとの二つの側面がある。それゆえに、人というものは外面から背くことも内心から背くこともあり、人々の和を図るにも心と体の二つを考えて、将軍たる者は、自ら心に羞じることは無いか、ということを思わねばならない。このようにしてこそ、後には様々な人を知るための「知」も又、出来てくるものである。人の心を映し出す鑑（かがみ）が曇りなく明らかであればこそ、後には天をも測り知ることができるのである。

天を測り、時を測りながらも、人の情を測ることがない。これを「人に逆らう」という。時に到ってその状勢を測りながらも、事機をつかむことが出来ない。これを事機に昏い（暗い）という。智者（道理をわきまえた人）は、天地にも逆らわず、事機にも暗くなく、鑑が明るく澄んでいて全ての影が消えてしまうようなものである。自己の私情をもって人を振り回さず、人に先立って万事を治める。それゆえに、危機に瀕した者がいればこれを安心させ、恐れる者がいればこれを悦ばし、叛こうとする者がいればこれを懐柔し、たしなめられる者がいればこれを伸ばし、弱者にはこれを助

け、強者にはこれを抑え、讒者（他人を貶めるために偽りを言う者）にはこれを覆し、謀略を図る者にはこれを親しくし、実直なものにはこれを称揚し、曲がった者にはこれを挫き、忠実な者にはこれを賞し、罪を犯す者にはこれを戒める。全てはその至情によってこれらのことを計るのだと言えよう。もっともその中において官位、家禄、死罪等の権限をはじめとして、あらゆる機転がこれらによってのみなされるものではないということを、智ある人（道理をわきまえた人）は理解し、適切に事を成さねばならない。